

## 中原音韻における「莊」などの合口音について

著者	望月 真澄
著者別名	MOCHIZUKI Masumi
雑誌名	漢文學會々報
巻	31
ページ	16-25
発行年	1972-06-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00149215">http://doi.org/10.15068/00149215</a>

# 中原音韻における〔莊〕などの合口音について

望 月 眞 澄

## 一 序

今日の北京語でもそうであるが、中古開口音から合口音に音韻推移した〔莊〕など、そり舌聲母の一群は、何故にそのような推移を取ったか、そのことについて、中原音韻を材料に考察を試みることにする。

高本漢著「中國音韻學研究」(一九二六、漢譯一九四〇)では、漢音・高麗譯音では開口でありながら、現代多くの方言で合口であること、安南譯音も合口であることから、唐末年からある方言に必ずこのような合口のものがあったにちがいないと述べている。

これに對して、ドラグノフ著「八思巴字與古漢語」(一九三〇、漢譯一九五九)では、高本漢の方言説をしりぞけ、 $\text{p}$ のあとでは、この聲母の影響で、古漢語の  $\text{p}$  はまず一種の  $\text{p} \cdot \text{p}$  に變化し、のちに變つたと述べている。

このように従來は、この合口要素の發生を單にそり舌音の出わりにのみ、その要因を求めていたが、小論では、更にそれに條件が付加されねばならないとするものである。

同時に三根谷徹の名論「韻鏡の三四等について」(言語研究第二二一・三號昭和二八年)の結論、「いわゆる三十六字母において側一之、初一昌、土一食、所一式、の各類が、それぞれ「照・穿・牀・審」の字母に合されているのも retroflex ( $\text{g}$ ・ $\text{ng}$ ) の palatal ( $\text{te}$ ・ $\text{ng}$ ) では (略) 諒解し難いが  $\text{ts} \cdot \text{t}$ 、 $\text{ts}' \cdot \text{t}$ 、 $\text{t}$ 、 $\text{d}$ 、 $\text{d}$ 、 $\text{s}$ 」とすれば考え易いことであり、既にそれらの子音に續く介音、主母音に差別が認められるに至ったと考える場合にはフォネムとしてはそれぞれ一つの

/tʃ, tʃʰ, dʒ, ʃ/ とすることも不可能ではない。」にも、中原音韻という段階から光を投じてみたい。

## 二 そり舌音化

いま中原音韻の中でも比較的單純な第十七韻目侵尋に例を取ろう。この平聲の第四小韻の「深」と第六小韻の「森」とは、相互に對立する音韻を有するものとして、周德清は群分けしているが、これはまた

中古音 反切      ハスバ      四聲通解      北京語

〔森〕    *sim<sup>1</sup>*    所今(侵) *ʃimi<sup>1</sup>*    *ʃem<sup>1</sup>*    *ʃes<sup>1</sup>*

〔深〕    *siem<sup>1</sup>*    式針(侵) *sim<sup>1</sup>*    *sim<sup>1</sup>*    *iues<sup>1</sup>*

のように、今日の北京音でこそ同音となりはすれ、その他は相對立していて、中原音韻の群分けと對應している。

しかも、この「森」對「深」という種類の對立は、特殊例ではなく、陸志韋も「釋中原音韻」で説くように、中古音の

舌上二等音と正齒二等音群

舌上三等音と正齒三等音群

の兩群の體系的な對立に對應するものである<sup>③</sup>。

韻鏡において、そり舌の調音の故に介音「ㄨ」をすでに失い直音となった正齒二等聲母のものは、四聲通解の諺文などにそのことが明瞭に示されている。この正齒二等聲母と合流する、中古舌上音も同じくそり舌化して同質となったことは容易に推定できる。

一方「深」系には介音の「ㄨ」があった。なぜなら、この第十七韻目では、韻母の對立としては、*/ue/*と*/me/*との對立しかない上に蒙古字韻、四聲通解のいづれにも明瞭に介音の「ㄨ」が示されているからである。

この「深」系の聲母にそり舌音を推定することは不可能である。

上掲の三根谷論文の *tsʰ* など、兩種の聲母の存在を認めるといふ結論は、中原音韻でも、舌上音の合流という事實

を含めて、ほぼ同様の状況にあってらう。この兩種の聲母が、介母との關係で相補的分布を成すからといって、一種のフオーネムに歸納してしまうことは、中原音韻においてどうであらう。

中古日母も第一東鍾・第四齊微韻目の合口音や、第三支思韻目で、そり舌音化が進みつつあったが、他は舌上・正齒三等系に平行した /s/ であった。

第十五庚青韻目には

中古音 反切      パスバ      四聲通解

25 [亨] xai      許庚(庚)      hein      hwein      開口

16 [興] xieü      虛陵(蒸)      hein      hiŋ      齊口

10 [轟] x<sup>w</sup>ai      呼宕(耕)      huŋ      huin      合口

26 [兄] xi<sup>w</sup>ai      許榮(庚)      hūin      hyuin      撮口

のような 四つの全對立、開・齊・合・撮の各口を有している。それ故いま例えば日母の

51 [仍] nziäü      如乘(蒸)      zin<sup>1</sup>      zin<sup>1</sup>

などにあつても 介音の /i/ をともなう /s/ であつたらうと推定される。

三 合口化

中古音が開口であつたにもかかわらず、中原音韻においては合口に推移したものは、次の三種である。

① 中古音 宕・江攝の舌上・正齒二等音から、中原音韻第二江陽韻となつたもの。

② 中古音 宕・江攝入聲から 中原音韻第十二歌戈韻となつたもの。

③ 中古音 果攝一等の舌頭・半舌・齒頭音から 中原音韻第十二歌戈韻のそれとなつたもの。

以上であるが、例外的に「抓」側交(肴)のように /sai/ から /sua/ となつたものもある。

三の一 江陽韻

中原音韻第二江陽韻で、開・齊・合・撮各口の對立すべてを備える同一聲母の小韻は

中古音 反切      パスハ      四聲通解

105 [行]    *ɣɑŋ³*    下浪(宕)    *ɣɑŋ³*    *hɑŋ³*

86 [向]    *xiɑŋ³*    許亮(漾)    *hiɑŋ³*    *hyɑŋ³*

99 [幌]    *ɣuɑŋ³*    胡廣(蕩)    *ɣoŋ³*    *hhoɑŋ³*

100 [況]    *xi'wɑŋ³*    許訪(漾)    *hœŋ³*    *hyoyɑŋ³* (俗)

である。ところで、「幌」とは、聲母、聲調のみが異なるところの

13 [荒]    *xuɑŋ³*    呼光(唐)    *huɑŋ³*    *hoɑŋ³*

なども併考すれば

8 [莊]    *tɕiɑŋ³*    側羊(陽)    *tɕiɑŋ³*    *coɑŋ³* (俗)

4 [霜]    *ɕiɑŋ³*    色莊(陽)    *ɕiɑŋ³*    *soɑŋ³* (俗)

4 [雙]    *sɑŋ³*    所江(江)    *suɑŋ³*    *soɑŋ³* (俗)

などのパスハ音や四聲通解の俗音の示すところは合口の /suɑŋ³/ などであったと推定してよい。

そして、中原音韻におけるこの新しい合口は、拗音の

6 [商]    *ɕiɑŋ³*    式羊(陽)    *sɑŋ³*    *ɕyɑŋ³*

と對立をなしている。なお、この拗音は、更に新しいそり舌音化とともに、介音の「ɕ」を失なって、今日の北京音の形式へと推移していくものである。

ところで、江陽韻以外の、聲母がそり舌音であり、かつ主要母音「ɑ」を有する中原音韻の合口は、

第十三韻目家麻の中の /ua/

第六韻目皆來の中の /uai/

第十韻目先天の中の /yan/

第八韻目寒山の中の /uan/

の四種であるが、この四種は、いずれも中古音の合口からのものであって、開口のものがそり舌音化を経たが故に合口に  
なったというものは皆無である。換言すれば、これらの四種の開口にあっては、聲母のそり舌音化がありながら、中古音  
の開口は、中原音韻の開口なのである。

このことは「莊」などが、そり舌音化した故に、その出わたりによって、合口要素を持つに至ったとする説明だけで  
は、不備であることが明らかである。

### 三の二 歌戈韻 A

中原音韻第十二歌戈韻は、第十四車遮韻と異り、/e/でなく /o/・/e/が、その音韻の基調となって整理されている。  
したがって

中古音 反切                      パスバ                      四聲通解

25 [合] yâp    侯閣(合)                      yô                      hha. hree (俗)

28 [活] yuât    戶括(末)                      yūo                      hhue

32 [學] yâk    胡覺(覺)

の三つの對立を示す群は、「學」に外國轉寫音を缺くにもかかわらず

25 [合] /haʔ/

28 [活] /huaʔ/

32 [學] /hye²/

と推定することができよう。<sup>④</sup>

かくて、現代北京音をも併考すれば、宕・江攝の中古入聲

中古音 反切

- 85 [諾] nək 奴各(鐸)は中原音韻で /nuə²/
- 90 [唐] nɛɪək 魚約(藥)は中原音韻で /nyə²/
- 87 [落] lak 盧各(鐸)は中原音韻で /luə²/
- 89 [略] liək 離灼(藥)は中原音韻で /lyə²/
- 33 [鑿] dzək 在角(鐸)は中原音韻で /tsuə²/
- 31 [濁] dak 直角(覺)は中原音韻で /tsuə²/
- 35 [著] diək 直略(藥)は中原音韻で /tɕyə²/
- 36 [杓] ziək 市若(藥)は中原音韻で /ɕyə²/
- 86 [弱] niək 而灼(藥)は中原音韻で /ɕyə²/
- 88 [惡] ək 烏各(鐸)は中原音韻で /uə²/
- 83 [約] iək 於略(藥)は中原音韻で /yə²/

と推定される。

このように推定するときに、第十四車遮韻と重複してしまう例が出てくる。しかも、文字はすべて異なる對であるので、従来の諸學説では、これにそれぞれ異なる韻母を歸納したのであった。

例えば第十四車遮韻の

中古音 反切      パスバ      四聲通解

41 [拙] tsɿ'at      職悅(薛) tʂ'ie      ɕnyɿ

60 [月] ng'wat      魚厥(月) 'yɛ      nyɿyɿ

63 [劣] l'wat      力輟(薛) l'ue      lyɿyɿ

などは、それぞれ第十二歌戈韻の 35・83・89 各小韻とは別の音韻として歸納するのである。

しかし、周德清自序で「樂府之備則自關・鄭・白・馬一新製作、韻共守自然之音、字能通天下之語」と述べる彰徳人、鄭廷玉の「布袋和尚忍字記雜劇」第四折には「説・撥・禾・多・塌・大・過」などのように、第十四車遮韻の「説」が、第十二歌戈韻の諸字と押韻する例があつて、第十二の 35 と第十四の 41 などの對も實は同音であつたことを暗示する。

また第十四車遮韻の /eɿ/ 韻が、中古音の p・t 入聲から推移したものであるのに對して第十二歌戈韻の /eɿ/ 韻は、中古、宕・江攝入聲から推移したものばかりであり、同時に第十一蕭豪韻にも重出するものばかりである。

これらの事實は、今日なお南昌方音に見るように周德清自身の言語に入聲が存在し、その知識が、同音韻を人爲的に整理した結果であると見られないだろうか。

ともかく、このように中古宕・江攝入聲は「鶴」などのような少數の例外もあるが、開口音から合口音に推移したことは事實である。

### 三の三 歌戈韻 B

中古音果攝一等の開・合口は、中原音韻では混成して單一の小韻を示し、しかも明らかに合口となつている。

しかし、これはあくまで中古一等韻の場合に限った現象であり、拗音には見られない。その點で、三の二とは區別される。



#### 四 解釋

三の一および三の二で述べたように、中古開口音で、中原音韻合口音となるものは、中古音宕・江攝の所謂 *velar-ŋ* / *ŋ* にかかわるものである。*velar-ŋ* / *ŋ* が *palatal-ŋ* / *ŋ* に合流するときに、なんらかの代償が必要であった。

宕・江攝の入聲消滅のときには、一方、第十一蕭豪韻で *Final-ŋ* / *ŋ* を留めたように、他方第十二歌戈韻では *Medial-ŋ* / *ŋ* の析出という形式をもって、おのれの傳統的本性を保とうとした。

ここでもし三の三の傾向が、宕攝入聲にも及んだとするならば、山攝入聲のすべてに平行して、合口要素が出現してもよかつたはずである。しかし、山攝入聲は、そうはならず中古合口音のみが、中原音韻合口音なのである。三の二にも指摘したように、第十一蕭豪韻との重層を示す宕・江攝入聲開口音から合口音に推移したものは、宕・江攝獨特のものとなさなくてはならない。

入聲消滅という激しい音韻變化においてはその本性保存本能が強く作用して、そり舌音以外にも、合口要素を留めた第十二歌戈韻の音韻に比して、第二江陽韻の音韻では、そり舌音化という *Medial-ŋ* / *ŋ* 要素を誘いやすい音韻的環境の部分にのみ典型的に出現したと言うべきであろう。

*Final-ŋ* / *ŋ* と *ŋ* / *ŋ* との合流後には、新しいそり舌音化が行なわれても、もはや *ŋ* / *ŋ* の記憶はなく、開口から開口へと推移しただけである。

例えば〔商〕は中原音韻 /*ŋ* / *ŋ* から北京音 /*ʃaŋ* / *ʃaŋ* のように、介音 *ŋ* / *ŋ* を吸収するにとどまる。

*Final-ŋ* / *ŋ* と *ŋ* / *ŋ* との對立を、今日もよく反映すると見られる福州方言では〔莊〕などは [tʃouŋ] のように *Final* が /*ŋ* / 要素を負うが故に、介音 *ŋ* / *ŋ* を誘いこまなかった。

朝鮮字音にも、中古音直音、開口の宕攝入聲〔澗〕が /*hwak* / となる異例があるとのことであるが、三の二に上述したものと共通した音理上の關連があるかもしれない。

## 五 結語

これを聲母から見るときにも、前述の

舌上二等韻と正齒二等韻群

舌上三等韻と正齒三等韻群

の兩群の性格は、このように音韻史上、重要な作用を持つ以上、フォネームとしても、截然たるものでなければいけないのではないだろうか。

王力は「漢語史稿」(一九五六)で、この兩種を設定し、その後「中國語言學史」(一九六三)では、證據不足のきらいがあるとして、兩種の區別をなくした。

陸志韋は「釋中原音韻」で、兩種を區別すること明確であったが、その音韻としての性格規定に的確さが不足していたように思う。

ともあれ、中國音韻史研究上での中古梗・宕・江・曾・通攝などの秘める問題解決のための鍵は、實に大きく、より魅惑のあるものと言わなければならない。

## 注

① 中古音は河野六郎先生著『朝鮮漢字音の研究』(一九六八)の體系に従う。パスバと略稱したものは、羅常培等編『八思巴字與元代漢語』(一九五九)の『蒙古字韻』に依り、服部四郎著『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』(一九四六)に採用された轉寫法で示した。『四聲通解』は、東洋文庫藏本を用い、河野先生の東京教育大學での『朝鮮語講義』に示された轉寫法に従う。

② 「釋中原音韻」(燕京學報・一九四六年十二月)四十三ページ。

③ 陸志韋も述べるように、支思韻と齊微韻とは、この兩群の對立が崩れており、小論では更に東鍾韻にもそれがあると指摘しよう。それは前群を第一次より舌音化の現象と言うなら、兩群混交は第二次の新しい舌音化とも言えよう。實際の押韻上も例えば、大都人、關漢卿の『包待制三勘蝴蝶夢雜劇』第一折で、支思韻の〔時〕と齊微韻の〔食〕とが、同じく〔見〕と〔日〕とが押韻するな

ど、目母も含めて、新しいそり舌音化もかなり進んでいたことを暗示していよう。

④服部氏は前掲書中で、『四聲通解』の(俗音)は元代の北京音を、(今俗音)は明初の北京音を反映しているかもしれないと述べているが、(今俗音)にも聲門閉鎖の記入があるので、中古入聲は、消滅し陰聲に派入したとはいえ全く同音ではなかったろう。

周德清自序で、また作詞起例で述べる「派入三聲者廣其韻耳」は、北京音の當時のこのような状況のことを指していることであろう。いまは便宜上、聲門閉鎖の記號は省略する。

⑤河野先生著前掲書百二十二ページ。

◎本論形成過程において、河野先生からは、貴重なご指導を賜わったばかりでなく、資料・参考論文等まで拜借した。末記ながら、心から感謝申し上げます。  
(一九七二・二・二三)(山梨縣立女子短大専任講師)